

## 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## &lt;論説&gt;H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(上)

著者	水野 節夫
雑誌名	社会労働研究
巻	24
号	1-2
ページ	49-78
発行年	1978-02-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018098">http://hdl.handle.net/10114/00018098</a>

# H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(上)

水野 節 夫

## (一)

一九六三年、P・バーガーは、C・H・クーリーやG・H・ミードをひきあいに出しながら、次のように言うことができた。「役割論は、もっぱらアメリカの知的発展の所産であるといつてよい。」<sup>(1)</sup>ここでは、この断言もしくは現状認識が『社会学への招待』という、それ自体魅力的な内容をそなえた社会学入門書の中でなされている点に注目したい。役割論はアメリカの伝統とみなされていたのである。<sup>(2)</sup>

しかし、こうした認識をくつがえす萌芽的な動きが、すでに五〇年代後半西ドイツにおいて準備されつつあった。一九五八年、R・ダーレンドルフは『ケルン社会学・社会心理学雑誌』に、「ホモ・ソシオロジクス——社会的役割というカテゴリーの歴史・意義・批判の試み」<sup>(3)</sup>を發表する。この論文は、二重の意味で当時の西ドイツ社会学に波紋を投げかけたといふことができる。

まず、さしあたりは、ヘホモ・ソシオロジクスという人間把握自体がひきおこした波紋である。周知のように、ダーレンドルフは先の論文で、N・グロスらの役割葛藤論研究とR・マートンの準拠集団論とをふまえて、彼独自の

役割論を展開したわけだが、その中で、役割同調的なホモ・ソシオロジクスと自由な個人とを対置させた。これに対して、はたしてそうした形で社会的人間像をとらえるべきかどうかをめぐって、A・ゲーレン、J・ハバーマス、H・プレスナー、J・ヤノスカールベンドル、H・P・バルト、D・クレッセンス、F・H・テンブルック等々が活発な議論を行なった。しかしながら、このホモ・ソシオロジクスをめぐる議論は、役割論の堀り下げ、展開という点から言えば、バルトやクレッセンスらの議論を例外として、実りある成果をうみださなかったようだ。<sup>(4)</sup>

とはいえ、そうした、より直接的な波紋の背後で、あるいはそうした論争の側圧を受けながら、ダーレンドルフの問題提起を受けとめ役割論の展開に向けて着実な作業をすすめていった社会学者たちも存在した。この、役割論の本格的検討への端初をつくったというのが、ダーレンドルフの役割論の第二の波紋の中味であり、ここでの私の関心からすれば、こちらの方がより重要である。実際、彼の役割論が発表されるまでは、西ドイツ社会学において役割論はそれほど議論・研究の対象とされていなかった。<sup>(5)</sup>ところが、多くの論者が指摘しているように、<sup>(6)</sup>ダーレンドルフの役割論以来、西ドイツ社会学にはH・リヒター、N・ルーマン、H・ポーピッツ、<sup>(7)</sup>H・P・ドライツェル、D・クレッセンス、J・ハバーマス、L・クラップマン、U・ゲルハルト、H・ヨアス等々、役割論研究の一大潮流が形成されることになる。もちろん、これらの論者は各々何らかの形でアメリカ社会学で展開されてきた役割論の成果をふまえた形で各々の議論を展開しているわけだから、その意味で、彼らはアメリカの伝統としての役割論と切れていると言ふことはできないであろう。しかし、では彼らの議論はアメリカの役割論に完全に包摂されているのかというと、決してそのように言うことはできず、むしろアメリカ社会学ではいまだ萌芽的だったと思われる諸問題を、より積極的・体系的な形で展開させていると判断する方がより正確だと思う。いずれにせよ、ゲルハルトやヨアスも述べている

ように、六〇年代後半から七〇年代にかけて、六〇年代前半のバーガーの見解に重要な修正をせまる形で、西ドイツ社会学内部に独自の役割論の伝統が生まれてきたことは争えない事実なのである。

こうした動向の中には、すぐれた視点や議論が見うけられるにもかかわらず、その紹介は、現状では皆無ではないにしても、十分とは言いがたいように思われる。そこで、私としては、西ドイツ社会学における役割論の中で興味深い視点を提供していると思われる論者の議論を批判的に紹介することにしたい。さしあたり本稿では、西ドイツ社会学における役割論の伝統の中でも最高水準の部類に属すると思われるH・P・ドライツェルの役割論を紹介することにする。

彼の役割論をとりあげる理由は大ざっぱに言って二つある。一つは、役割論が現段階で直面している事情に由来する。それは、端的に、役割一般というレベルだけで役割論を議論することの不毛性と言うことができる。山口節郎氏も問題提起されているように、<sup>(10)</sup>何らかの形で役割、ひいては役割論自体の分節化が要請されている。そして、私の判断によれば、ドライツェルの役割論はこの要請にかなりの程度応えている。そのことは、後に詳しく見るように、役割概念そのものの再検討を通じておこなわれている、役割概念への主体的契機のかみこみ、社会的役割分類図式の提示、役割関係を媒介とした自我同一性形成過程についての議論等々に見ることができる。

もう一つの理由は、私自身の基本的な問題関心に由来する。これは、社会自体を研究主題としている数多くの調査研究成果や研究者がすでに存在するからこそ言えることなのだが、私としては、社会と個人との関係を論ずる場合でも、徹底して個人の側から、個人の「生活Ⅱ生きかた」をさぐるという視角から見えていきたいという志向が存在する。その際、どうしても社会的存在としてのわれわれのありようの問題を避けて通ることができない。ここではまだ一般

的な形でしか語れないが、われわれは個人として生きているだけではなく、社会的存在でもある。そして、そのことによって、いやおうなく何らかの規定性をこうむらざるをえない。ところで、そこである「規定性」とはどういうものなのか、また、それが個々人にとってもつ実存的意味は何でありうるのか、こうした、いわば「個人にとっての社会的なるものの意味」を分節化してとらえていくという視点こそ、社会的次元に関する私の基本的問題関心なのだ。これを役割論の方にひきつけて言うならば、「個人にとっての役割の意味もしくは役割体験の意味」を探るといふことになる。こうした問題意識を具体化しようとする際、ドライツェルの役割論を批判的に摂取することは、彼が「役割と個人」との関係を分節化して議論していること、さらにすすんで、いわば役割関係という網の目を媒介にして人間形成の問題に言及しているだけに、参考になるように思われる。言いかえれば、どういう形で役割論を展開していけば、われわれが生きている社会の現実を個々人に即して認識していく上で、役割分析的視角が有効な武器になりうるのか、その手がかりをつかむための一つの媒介として、ドライツェルの役割論は位置づけることができるように思われるのである。

## (一)の注

- (1) Berger, P. L., *Invitation to Sociology*, Penguin Books, 1963, p. 111.
- (2) 同様な認識はパーソンズにも見られる。cf) Parsons, T.: *An Outline of the Social System*, in: Parsons, T., Shils, E., Naegle, K. D., Pitts, J. R. (eds.), *Theories of Society*, New York, 1961, p. 41 (Vol. 1) アメリカの伝統としての役割論という把握に対して、はっきりと異論を唱えている論者としてはゲルハルトがいる。役割論の基本的な考え方はす

にデイルタイの著作に見られるということ、さらにジンメルの「社会的なるもの」というカテゴリーは最近の役割分析に直接つながるものだというのが彼女の主張であり、事実ジンメル的発想をふまえた役割論を展開している。cf) Gerhardt, U., *Rollenanalyse als kritische Soziologie*, Neuwied/Berlin, 1971, s. 21—40 (以下 Raks と略記。この著作は、佐藤勉教授の御好意により入取できたものです。) なお、ポーピッツも役割論との関連でジンメルに言及している。Popitz, H., *Der Begriff der sozialen Rolle als Element der soziologischen Theorie*, Tübingen, 1967, s. 32ff.

- (3) Dahrendorf, R., *Homo Sociologicus; Ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und Kritik der Kategorie der sozialen Rolle*, Köln, 1958. 橋本和幸訳『ホモ・ソシオロジクス』ミネルヴァ書房、一九七三。

- (4) これはヨアスによる「ホモ・ソシオロジクス」論をめぐる論争についての評価である。Joas, H., *Die gegenwärtige Lage der soziologischen Rollentheorie*, Frankfurt/Main, 1975<sup>2</sup>, s. 18—22 (以下 gLSR と略記。なお 1975<sup>2</sup> の 2 は第二版の意味である。「ホモ・ソシオロジクス」論に関する文献については、同書 s. 140—148 を参照。) はたしてヨアスの評価が正當なものか否かは、それはそれで検討してみる必要があるが、その作業は別の機会に譲ることにして、ここではさしあたり彼の評価をそのまま借用させてもらうことにする。

- (5) もちろん、ダーレンドルフ以前にも、戦後西ドイツ社会学の内部で役割論もしくはそれに関連した領域を扱った議論が存在しなかったわけではない。cf) Hans, K., *Zur Psychologie und Psychopathologie der mitmenschlichen Rollen*, in: *Psyche*, II (1949), Heft 4, s. 551—595; Kluth, H., *Sozialprestige und sozialer Status*, Stuttgart, 1957; Claessens, D., *Status als entwicklungssoziologischer Begriff*, Göttingen, 1957. しかし、西ドイツ社会学界で役割論が本格的にとりくまれる端初をつくったのは、彼の「ホモ・ソシオロジクス」論がひきおこした衝撃であったことにはかわりがないのである。ダーレンドルフの議論がアメリカ社会学の役割論のドイツへの導入として受けとめられていたことは、たとえばパーソンス的立場からダーレンドルフの役割論を批判したテンブルックの論文の標題が「役割論のドイツ的受容に向けて」(強調は引用者による) (Tenbruck, F. H., *Zur deutschen Rezeption der Rollentheorie*; in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 13, 1961, s. 1—40) となっていることからもうかがうことができる。なお、これと関連して、

時の役割論が圧倒的にアメリカ社会学の影響下にあったという点については、Claessens, D., *Rolle und Macht*, München, 1974<sup>3</sup>, s. 36—37. (以下 RuM と略記) 参照。

- (9) Dreitzel, H. P., *Die gesellschaftlichen Leiden und das Leiden an der Gesellschaft*, Stuttgart, 1972<sup>2</sup>, s. 95 (以下 GLG と略記); Claessens, D., RuM, S. 20; Gerhardt, U., Raks, s. 40-s. 47. Joas, H., glsR, s. 9.

- (7) もしあたり、論文として発表されたものや現時点で入取できないものを除いて、本になつてゐるものに限ってみても以下のようになる。Richter, H-E., *Eltern, Kind und Neurose*, Stuttgart, 1963; Luhmann, N., *Funktion und Folgen formaler Organisation*, Berlin, 1964; Popitz, H., op. cit., 1967; Deitzel, H. P., GLG, 1968<sup>1</sup>; Claessens, D., RuM, 1968<sup>1</sup>; Habermas, J., *Thesen zur Theorie der Sozialisation*, 1968; Krappman, L., *Soziologische Dimensionen der Identität*, Stuttgart, 1969<sup>1</sup>; Gerhardt, U., Raks, 1971; Joas, H., glsR, 1973<sup>1</sup>; Coburn-Staege, U., *Der Rollenbegriff*, Heidelberg, 1973.

- (8) Gerhardt, U., Raks, s. 18—19; Joas, H., glsR s. 9—10.

- (9) 森好夫『文化と社会的役割』恒星社厚生閣、一九七二。

- (10) 山口節郎「社会学と役割理論」『エピステーメー』朝日出版社、一九七五、一一月号、一四六—七。山口氏がそこで提起されていることは、直接には役割の分節化であるが、その点をつきつめていけばいやおうなく役割論自体の分節化へと到らざるをえないと思われる。

## (11)

ここで紹介するドライツェルの役割論というのは、彼が『社会的苦悩と社会に起因する苦悩』(Die gesellschaftlichen Leiden und das Leiden an der Gesellschaft) という著作の、とりわけ第三章から第五章にかけて展開しているものである。ドライツェルは、なぜ役割論を展開せざるをえなかったのか。この点を知るために、まずはじめに

彼の基本的問題関心に耳を傾けることにしよう。

先の標題にも明示されているように、ドライツェルがここで己れ自身に課している課題は、社会、とりわけ高度に産業化された社会自体のはらみもつ病理もしくは苦悩と、その社会における個々の人間の病理もしくは苦悩との間の連関をいかにつけるか、という問題である。これを彼はまた、社会的なるものの病理学の展開とも言いあらわしている。この課題を解いていく鍵となる概念としてドライツェルが着目するのは、マルクスの疎外とデュルケームのアノミーである。ドライツェルの見るところでは、両概念とも先の問題をとく上で戦略的に重要な位置を占めているが、現状ではさまざまな難点・限界をかかえている。

マルクスの疎外概念の問題点はどこにあるのか。ドライツェルは、マルクスの疎外概念の特徴を次のように言う。「それは、一見したところでは、資本主義的商品経済の経済学的分析の副産物である。」(5——以下、数字はドライツェル前掲書の頁を指すものとする)そこから、彼は、二つの命題、つまり(階級斗争の歴史としての)歴史が続く限り、人間はつねに疎外されているという一般命題と、この疎外は経済的諸関係に基づいているという特殊命題を導きだしてくる。

資本制社会においては止揚不可能な、人間の本質的特徴としての「扮装」(Charaktermaske)という発想は、この一般命題に関連したものであるが、ドライツェルはこうした一般命題としての疎外概念を、社会病理学の概念道具としてはふさわしくないとして批判する。というのは、そうした疎外の把握の仕方では、社会一般の批判へと議論が拡散してしまうため、より分散化された社会諸関係という次元での問題性をおおい隠してしまい、したがってドライツェルのいう意味での社会的なるものの病理学の展開という問題領域がすっぱりと抜けおちてしまうからである。<sup>(1)</sup>



他方、特殊命題についてのドライツェルの評価は若干異なる。ドライツェルはそこに支配諸関係の搾取的性格と労働の商品的性格への示唆を読みとる。ただし、ドライツェル自身は「支配は搾取を意味しうるし、労働が商品的性格をおびるということはありうる。しかし、必ずそうであるというわけではない。」(5)として、そうした示唆がどこまで妥当するかという点に対して距離をとっている。少くとも、ドライツェルの直接の分析対象である、高度に産業化された社会について言えば、社会の病理を、いわんや社会における個々人の病理を資本主義分析のみからひきだすことはできないというのが、ドライツェルの立場である。そうした留保があるにせよ、ドライツェルは〈支配〉と〈労働〉という現象のうちに、疎外の原因に関するすぐれた洞察を見いだす。そして、先の特殊命題からドライツェルがひきだしてくる視点は、経済状態と労働状況と疎外との間に連関が存在するというものである。

さて、それでは先の問題にもどって、社会諸関係という次元の問題性を隠蔽しない形で、社会的なるものの病理学を、ドライツェルはどのように展開していこうというのであろうか。ドライツェルにとって、社会とは何ら実体的なものではなく、作用諸連関の網の目である。したがって、社会的なるものの病理学の展開にしたところで、たとえば、社会自体が精神病理学的な意味で神経症的でありうるか否かといった形で問題にされるわけではない。彼が着目するのは個々人の「行動障害(Verhaltensstörung)」である。「社会病理学にとって本質的なカテゴリーは行動障害というカテゴリーである。」(15) 社会の病理的なるものは行動障害のうちに沈澱している、とドライツェルは考える。逆に言えば、行動障害という個々人にとっての苦悩のうちに、社会構造のゆがみとしての社会の病理を読みとろうというわけである。要するに、〈社会はその成員の病的傾向を強める〉という視点と〈個人的苦悩は社会構造にもとづく〉という視点とを共に生かしながら、社会の病理を個々人の次元でどのようにテーマ化・精緻化していくことができる

かというのが、ドライツェルの基本的な問題関心であるということができる。

それはともかく、どうして行動障害のうちに社会の病理を読みとることができるのだろうか。それは、身体的な理由によるものを別にすれば、行動障害というものがあらわれてくるのは相互行為過程においてであるからだ、とドライツェルは主張する。「行動の障害は同時にまた相互行為自体の障害でもある。そして、この相互行為過程のうちに行動障害をつきとめることができる。」(23) というわけである。

このように、相互行為過程における行動もしくは行動障害に着目することによって、彼は社会と個人との関連づけという問題に、より具体的な方向づけを与えようとしているわけだが、彼はこの具体化をさらにおしすすめるために社会的役割という視点の導入を提起する。といっても、ここでただちに役割論が展開されているわけではなく、次のような諸点が確認されているにすぎない。つまり(1)行動というものは、社会によってすでに与えられている特定の目標や規則にのっとっておこなわれるという性格を強く示しているということ、(2)したがって、行動障害の原因は、社会的規範や社会的に制度化された行為目標のうちに見いだすことができるということ、(3)ところで、既に設定された行為目標や行動パターンの複合体を社会学では「社会的役割」と呼びならわしているわけだから、この点をふまえて言えば、個々人は社会的役割において社会病理現象に遭遇するということが、(4)したがって、社会病理現象は役割分析的に追求することができるといふことなどである。言いかえると、ドライツェルは、行動障害の問題を役割行動次元での問題として把握することによって、社会的なるものの病理学を展開しようとみているわけである。

ところで、ドライツェルによれば、社会病理現象の社会学的分析としては、すでに社会解体論、価値対立葛藤論、逸脱行動論という三つの異なった流れがあつて、それらは「社会諸関係は、つねに規範や価値によって規制され方向

づけられている」(21) という発想を議論の出発点として共有しているという。ドライツェルは、第三の逸脱行動論との関連で、規範の問題に逆照明を与えているアノミー論のかなり詳細な検討をおこなっている。<sup>(2)</sup>それは、『分業論』から『自殺論』へと到る過程で変貌をとげたデュルケームのアノミー論の展開のあとづけからはじまって、マートンによって提起された文化的価値と制度的規範との間のギャップを問題とする社会的アノミー論、並びに社会体系とパーソナリティー体系とのギャップをついたパーソンズの心理学的アノミー論の批判的検討にまで及ぶ、包括的なものであるが、ここでは、ドライツェルの役割論の紹介を主眼としているという事情もあって、彼がそうしたアノミー概念の批判的検討の中から導きだしてきた結論的なまとめのうち、アノミーに関する部分を紹介することによって、彼が「アノミー概念の役割分析的規定」<sup>(3)</sup>という場合、どのような視角からどのような仕方であノミー論に切りこんでいるかとしているのか、という点に照明をあてることにする。ドライツェルは言う――

「一、アノミーとは相互行為状況の規範が不確実な状態のことである。

二、相互行為状況の規範は、役割期待として相互行為の相手に与えられる。したがって、アノミーとは役割行為(Rollenspiel)<sup>(4)</sup>の可能性が不確実になってしまったか失なわれてしまった状態のことである。

三、アノミーにはさまざまな度合がある。規範的方向づけが一時的に不安定といった程度のアノミーは数多くの日常的相互行為状況の一部を構成している。これに対して、高度なアノミーが存在するが、これが経験的に認められるのは、慣れ親しんだいつもの行動を回避するとか、一般に期待されている行動をおもいとどまるといった場合である。

四、アノミーの帰結は相互的な役割行動の障害であり、したがってまた相互行為状況の障害である。その際前提と

されているのは、客観的に存在する方向喪失は主観的にもそのように体験されるということ、したがって、その反応として強迫的な行動が導きだされるということである。

五、高度のアノミーになると、相互行為そのものが不可能になるか、そもそも不可能であったことが確認される。この場合、相互行為の相手との接触を回避することができるようなら、その相手に対して強迫的に距離をとるようになるが、そのことは、大部分の場合、距離をとっている側の活動の余地までも狭めることを意味する。接触が避けられない場合にはアノミー的対立葛藤が強迫的な形でくりかえし生じてくるだろう。」(80～81)

このように、ドライツェルは、相互行為状況における役割期待との関連でアノミーを把握しようとする。こうした志向からすれば、これまでのアノミー論の水準はあまりにも一般的であいまいなものとして批判されざるをえない。そして、そうした水準をのりこえるためには、さしあたり「役割行動と状況類型と行為の規範的方向づけの三者を、体系的連関のあるものとして概念的に分析しなくてはならない」(81～82)とされる。ドライツェルはこの課題を役割論の精緻化もしくは分節化として遂行しようとする。<sup>(5)</sup>

## (二)への注

- (1) 社会一般の批判ということをドライツェルがないがしろにしているわけではない。彼は、以下で紹介する社会病理の役割分析的研究を補完するものとして、当該社会もしくは社会制度のイデオロギー批判の必要性を論じている。cf) *GLGs*. 352
- なお、役割分析的研究の方をおこなう理由として、彼は、イデオロギー批判の領域におけるよりも役割理論の方に社会学理論の空白が存在するという事情をあげている。

- (2) 彼がアノミー概念に着目する理由は、「人間の共同生活に何らかの形で無秩序をもたらすと思われる社会現象の理論的解

明にとってアノミー概念が特異な地位を占めている」(31)という判断に由来する。なお、彼は、「適応行動と逸脱行動——アノミー概念批判」という標題をもつ第二章(GLG s. 31—94)を、文字通りアノミー概念の問題性の検討にあてている。

(3) これは第二章第五項の標題である。

(4) ドライツェルは〈Rollenspiel〉を、役割行動の能動的性格を含みもった〈role enactment〉の意味で用いると断わっている(GLG s. 208)。私としてはそうした意味をこめてこれを「役割行為」という訳で統一したい。なお、土方文一郎氏の場合、この〈role enactment〉は「役割期待を知覚によって把握、それに対して反応する機制の全側面」という意味で「役割実現」と訳されている。(サービン「役割(ロール)の理論」土方文一郎訳、みず書房、昭和三十一年、の「解説」九三頁)「役割実現」だと〈role realization〉との、「役割行為」だと〈Rollenhandeln〉との区別がそれぞれつかないという難点が生じてくる。

(5) 別の個所ではこの研究の意図を次のようにも述べている。「理論的準拠枠を獲得し、それでもって社会病理現象に関する将来の研究のための基礎がためをするために、若干の概念や定理を批判的に吟味し論理的連関をつけること。」(25)

### (三)

さて、役割論の精緻化もしくは分節化にあたって彼が着目する問題領域は、――

(一)、社会的役割と人間との関係についての問題、

(二)、行動が規範的性格をおびてくる過程についての問題、

(三)、役割行為を規定する諸条件に関する問題、

の三つである。<sup>(1)</sup>(一)は、役割の担い手である個人とその役割との関係がどういう性質のものであるかという問題であると同時に、より基本的には、人間存在にとって役割概念がどういう意味をもっているかという問いをも含みもって

いる。社会的役割という場合、それは規範的性格をもった個別的な役割期待からなりたっていることが前提とされているわけだが、しかし、そうした期待が規範性をおびてくるのはなぜか、またそこでいう「規範」とはどういうことなのか、——ドライツェルが(二)で論じようとしているのはこうした問題である。(三)の問題は、われわれに期待されている役割行為はどのような諸条件のもとで現実化されていくのであろうか、と言いかえることができる。ドライツェルは、(一)、とりわけ(二)の検討から独自の社会的役割分類図式を提示するとともに、(三)の検討をふまえて、さらなる役割論の展開を試みている。以下、順を追って見ていくことにしたい。

(一) 社会的役割と人間との関係について

われわれの日常生活は役割行動でほとんどおおいつくされていると言っても過言でないほどなのに、通常われわれは自分たちの行動様式にそなわっている役割としての性格(Rollencharakter)を意識していない。たとえば、A氏がかりに医者だったとすると、病院でのA氏の行動は医者としての行動・ふるまいであるわけだが、A氏のそうした行動を評する場合、われわれは決して「A氏は医者としての役割を演じている」といった表現はしないものだ。これはなぜか。それは、大部分の場合、A氏が医者としての役割になりきって、その役割を生きているからである。これは何もA氏に限ったことではない。通常、われわれはすべて、各瞬間を何らかの役割になりきって生きている。いやむしろ「何者かになりきることを強制されているのだ」(Zwang zur Personifikation)とドライツェルは言う。彼はその根拠を、肉体的存在を所有するということが人間存在にとってきわめて困難であるという事情に求めている。逆にまた、この何らかの肉体的存在をもった者になりきることへの強制は役割行動を可能とさせる条件として把握される。「役割行為者が社会的行為という舞台に登場しうるのは、ただ自己の役割に同一化した人物としてのみである」(106)

というわけである。

この点に関連させてドライツェルが提示してくる議論に自己と他者の間の「パースペクティヴの相互性」(Reziprozität der Perspektiven)といわれるものがある。われわれは、特定の役割を担い、それになりきることによって、その役割から見たパースペクティヴを取得するわけだが、そのパースペクティヴには、その役割を一環とした役割体系内にある他の役割との関連もくみこまれている。あるいは、何らかの形でそうしたくみこみがない限り、役割としてのパースペクティヴを取得したことにはならないと言ってもよい。いずれにせよ、パースペクティヴの相互性とは、相互行為過程において行動しようとする際、自分のパースペクティヴだけでなく相手のパースペクティヴもとれるということ、しかも、そのことによって相手の反応がある程度まで予測しうるということを指している。ドライツェルによれば、こうしたパースペクティヴの相互性こそ、社会関係における人間行動の役割としての性格を可能とすると同時に条件づけている当のもののなのである。

社会的役割とそれを担う人間との関係については、もう一つ、自我同一性 (Ich-Identität) と社会的役割との関連という問題がある。ドライツェルの自我同一性形成論 (これはエリクソンの議論をふまえている) の詳細については、後述にゆずることにして、ここでは、人間が肉体をそなえた何者かになっていくという過程を通じて自我同一性が形成されてくるということ、ならびに、自我同一性と社会的役割との関連は相互的なものであって、社会的役割は自我同一性の安定性を保証する契機であると同時に、他方自我同一性の方は役割行動にとって必要かつ安定的な基盤を提供している——このようにドライツェルがおさえている点だけを指摘しておく。

(二) 〈行動が規範的性格をおびてくる過程について〉

この問題に接近するための手がかりを、彼は「定型化」(Typisierung)、「定型化図式」(Typisierungsschemata)、「関連テーマ群の範囲」(Relevanzbereich)といった概念に求める。

まず定型化の説明からはじめることにしよう。定型化とは、ある現象を何らかの定まった型にはまった何ものかとして把える抽象化作用のことである。「社会的世界は、頭初から定型化された世界としてたちあらわれる。」(109)たとえば、スーパーマーケットに夕飯の買物に出かけていくとか、週のはじめに職場で同僚といつもの仕事上の打ちあわせをするとか、妻や子供たちと一諸に食卓をかこむとか、こうした日常生活の中でくりかえし生起してくる出来事をふりかえってみると、そうした出来事は、一回一回が違った何かを含みもっていることは事実だとしても、やはりそこには「くりかえし生起してくる」という実感をうらうちするだけの定型的な核があることは疑いえない。ドライツェルが注目するのは、とりわけ、個々人の認識という次元において自己や他者の行動や人間、状況が、そうした定型へといやおうなくはめこまれ了解されていく過程なのである。こうした絶えざる定型化を媒介にして形成されてくる社会的世界の中で、この定型化を手がかりにして、個々人は自己の行動の方向づけをおこなっているとドライツェルは考える。「日常生活世界の現実には、はじめから定型化されており、したがって、ある特定の抽象のもとに与えられている。そして、われわれは、この定型化された世界に行動の自己様式化を通じて広範囲にわたる適応をなしとげる。その結果、おのずから行動にある種の規則性が生じてくる。自己と他者の行動に規則性がうまれてくると、相互的な行動期待に根拠が与えられる。行動の定型化は、他者との関係に、予測性と(それによって)安定性を提供する。」(111)

ドライツェルが定型化に注目するもう一つの理由は、役割期待との関連があるからである。「自己や他者の行動を



定型化せよという要求は、特定の状況における特定の役割期待という形でうまれてくる。」(111) もちろん、定型化が即、役割期待というわけではない。というのは、役割期待にまで結晶化するためには、定型化に規範性が付与されなくてはならないからである。確かに、行動の方向づけの指針を提供することによって、行動の安定性を事実上保証しているという意味で、定型化には規範性への萌芽がある。しかしそれ自体としてはまだ規範的性格をそなえてはいないのである。では、どういう場合にこの定型化は規範性をおびてくるのか。それは、行動の安定性が単に事実の上ではなく、社会的強制力をもって保証される場合、つまり個々人の主観的な定型化が集団成員に共有された定型化図式へと変容をとげた時であるとドライツェルは言う。このように、規範的性格を媒介にして、定型化図式は役割期待と連結される。したがって、定型化図式にのっとった行動の方向づけという場合には、単なる予測性をこえて、社会的規範の拘束力が役割期待として関与していることになる。「役割期待とは分化された行動規範である」(112)と規定される所以である。<sup>(2)</sup>

ドライツェルの役割論にとって、これから紹介する〈Relevanzbereich〉という概念は、きわめて重要な地位を占めている。と同時に、その定義となると、「A・シュッツは、特定の関心分野にとって意義のある所与性 (Gegebenheiten) の範囲を指して〈Relevanzbereich〉と名づけている。」(114)といった具合に、いかにもわかりにくい。幸い、〈Relevanzbereich〉の説明の前段として、ドライツェル自身、規範と価値の違いに言及しているので、私としてもこの点からはじめよう。社会的規範とは期待された行動が実現されるチャンスである、と形式的な定義を与えてから、彼は規範と価値の区別を説明して次のように言う。「規範とは、外的サンクションと結びつけられた特殊具体的な行動規則である。他方、価値とは、より一般的な形で内面化された行動の方向づけのことであり、そこには、文

化によって異なった、社会行為の意味理解が表現されている。」(113) この区別をふまえて言えば、規範と密接な関連にあるのが定型化図式であり、これに対して、価値と関連するのが〈Relevanzbereich〉である。ここで確認しておきたいのは、より一般的な行動の方向づけと関係づけられて、〈Relevanzbereich〉が把握されているという点である。要するに、ある行為領域がどのような性格をおびているかを規定するものとして〈Relevanzbereich〉が構想されていると考えることができると思う。したがって、私としては〈Relevanzbereich〉を「行為に関連のある問題・テーマ群の範囲」、もしくはより短かく「関連テーマ群の範囲」と名づけることにしたい。

ドライツェルは関連テーマ群の範囲のヒエラルヒーという議論をおこなっているが、そこには矛盾する二つの考え方が共存しているように思われる。一方では「関連テーマ群の範囲は、社会の価値評価(eine gesellschaftliche Bewertung)によって一つのヒエラルヒーのもとに秩序づけられており、規範的構造をもっている」(114)と、社会(Gesellschaft)の次元におけるヒエラルヒーの存在を示唆している。他方では次のようにも言っている。「すべての集団は、関連テーマ群の範囲に関する集団固有のヒエラルヒーを持っている。言いかえれば、固有な価値評価体系を持っているわけだ。ここでは「集団間の」合意を前提にすることはできない。」(115)ここでは、はっきりと集団(Gruppe)の次元と関連づけて、関連テーマ群の範囲のヒエラルヒーは議論されている。このあいまい性は、ある意味では、ドライツェルに特徴的なことなのだが、それはともかく、彼としては、前者、つまり社会の次元におけるヒエラルヒーの存在の方に傾むいているようである。そのことは、たとえば、多様な集団・パースペクティヴを統合する一つのメカニズムとして「関連テーマ群の範囲と定型化図式には、制度として強化され集団や組織の限界をこえてその制度的性格を維持する傾向がある」(115・116)と指摘している点からもうかがえる。しかしそれ以上に、次のような社会的役

割の規定——実はこれをおこなうために彼は関連テーマ群の範囲という概念を導入してきたのであるが——の仕方には、集団の次元ではなく社会の次元と関係づけられた、関連テーマ群の範囲のヒエラルヒーという発想が如実にあらわれている。その規定とは「社会的役割という概念は、有意味的統一性にまで定型化された行動の、社会による期待 (die gesellschaftliche Erwartung) を示している。その限りにおいて、社会的役割とは関連テーマ群の範囲内における定型化システムの分化されたものである。」(116) というものである。

さて、先に定型化図式にのっとった行動の方向づけには社会的規範の拘束力が関与していると述べておいたが、次に、この社会的規範の拘束力をめぐる問題に議論を移したい。経験的に見た場合、社会的規範の拘束力は時、所によってさまざまなわけだが、その多様性を統一的にとらえるために、ドライツェルは、

(i) 社会的規範が所与としてどのように与えられているか (Gegebenheitsweise)

(ii) 社会的規範はどの範囲内で妥当しているのか (Geltungsbereich)

という二つの視角から、社会的規範の分節化を試みる。

(i) の問題からとりかかるところにしよう。この問題に接近するためには、あらかじめ役割行為の性格について検討を加えておかななくてはならない。先に、役割概念が人間存在にとっても意味として、われわれは大部分の場合役割を演ずるのではなく、役割になりきりそれを生きるのである、と述べておいた。これは、役割を担う主体に即した見方である。他方、役割の側から、あるいはより厳密に言えば、その役割を一環として含みもつ役割体系の側から見ればどうなるか。ある人間が役割になりきりそれを生きるということは、役割体系の維持・存続を意味していると言える。では、次にこうした点をふまえて、へしたがって、役割行為とは、役割を担う主体にとって有意味的であると同一

時に、役割体系にとっても機能的な行為である」と、このように言うことができるであろうか。答は「イエス」であり「ノー」である。なぜなら、役割行為が役割体系にとっても機能的な行為であるという点は事実だとしても、役割行為がその役割の担い手にとっても意味的であるとは、必ずしも言えないからである。これはなぜか。その理由は、(1) 役割行為が役割の担い手にとっても意味がさまざまでありうるということ（これは役割同一性の問題として論ずることができる）、ならびに(2) 役割を媒介にした自己実現の可能性が役割類型によってさまざまであるという事情、この二点に求めることができる。

(1)の例としては、同じ生産現場の労働者であったとしても、たとえば中途採用者と標準採用者とは、その役割行為のもつ意味が相当異なるといった場合があげられよう。

(2)について言えば、同じく役割といったところで、たとえば医師の役割と生産現場での労働者の役割とは、その役割の特質、とりわけ役割の担い手がその役割を通して自己実現しうる、もしくは主体性を発揮しうる可能性は、相対的に異なっておりざるをえないということである。そして、この(2)の点に、役割期待に体现された社会的規範の拘束力の違いが関連しているのである。

さて、ドライツェルは、この(2)の問題を、主体的営為 (*Ich-Leistung*) と役割期待との関連の問題としてとりあつかっている。つまり役割と個人とをただ単に対立的にとらえるのではなく、個々人の主体的営為を役割の構成契機としてくみいれた上で、役割期待に占める主体的営為の度合というものを想定し、この違いに応じて、役割期待、ひいてはそれに体现されている社会的規範の拘束力の強さを分節的に把握しようとする。「ある状況の中で、ある役割に対して規範がどのように与えられているかは、その役割に要求されている主体的営為との関連で多様である。その多

様性は、役割行為の個性的な自己形成(Selbstgestaltung)を一方の極とし、役割行為の完全な他者規定(Frembestimmung)を他の極とする連続体として描くことができる。」(811)というわけである。この点をふまえた上で、(i)の社会的規範が所与としてどのように与えられているか、という先にかかげておいた問題は、次のように答えられる。すなわち、ドライツェルは主体的営為が社会的規範にどれだけくみこまれているか、その度合に着目して、つまり規範の特性(die Art der Normen)を基準にして、「既定の役割執行のための規範」(Vollzugsnormen)、「役割課題達成のための規範」(Qualitätsnormen)、「役割の個性的形成のための規範」(Gestaltungsnormen) という三つの規範を区別している。

「既定の役割執行のための規範」においては、役割の担い手自身の主体的営為よりも、厳格な規則への服従が役割の規範として尊ばれる。

「役割課題達成のための規範」においては、主体的営為は確かに要求されるが、しかし、それもある特定の課題の遂行にとって必要とされる限りにおいてであり、したがって、主体的営為と遂行の規則とがいわば均衡を保っているのがその特徴である。

「役割の個性的形成のための規範」においては、役割の担い手自身の価値志向が前面におどりだした形での主体的営為が要求される<sup>(3)</sup>。

では次に(ii)の社会的規範の妥当領域の問題に移ろう。社会的規範がどの範囲内で妥当するのか、という問いは、役割との関連で言えば、役割期待の妥当領域の問題として論ずることができる。役割期待がある個人に関わるのは、彼が役割の担い手である限りにおいてであることは言うまでもない。「役割の担い手」と表現したが、役割という場合

にはつねに何らかの役割体系を前提にしているのだから、「ある役割体系の中のあるポジションの担い手」と言った方が、より正確かもしれない。いずれにせよ、役割期待とある個人との関係がそうしたものであるとするならば、その個人が役割もしくはポジションの担い手でなくなった瞬間から役割期待は効力を失ってしまうはずである。こうした形式的議論は確かにすべての役割期待にあてはまるように見える。しかし、はたしてそうか。ここには社会的役割と役割の担い手との分離可能性という問題が提起されているわけだが、この問題はすべての役割について同じように議論できるのだろうか。ドライツェルの立場は「役割と個人との分離可能性は、役割類型の違いに応じてきわめて異なっている」というものである。たとえば「親子」という関係にある行為主体たちが縁を切る（「オマエは勘当だ！」）という事態にたちいたった場合、双方にとって極度の精神的苦痛が予想される。その理由は、「親」としての、あるいは「子」としての役割が双方の個人のパーソナリティーの内に深く喰い込んでいるから、あるいは多くの場合にはむしろ、そのような役割関係を生きる過程を通じて双方の個人のパーソナリティーが形成されてきたからと言うことができるであろう。これに対して、もともと二、三年会社勤めでもして適当な時期に結婚相手でも見つければ退職するつもりでいた新入女子社員が、上司との、ちょっとしたいざこざがこじれてその会社を辞めることになったという場合、彼女にとっては、その「社員」という役割を脱ぎ捨てることなど、さしてむずかしいことではないだろう。これらの例が示唆しているのは、役割の類型如何によって、個人と役割との分離可能性は多様であるということである。そして、その分離可能性が異なるのに応じて、個人にとっては、役割規範の妥当領域の内実が異なったものになることは言うまでもない。ドライツェルは、この点を役割との同一化（Identifikation）の度合の問題として論じている。つまり、ある役割に対してその役割の担い手たる個人が無意識のうちに同一化している度合の違いに応じて、役

割と個人との分離可能性が大きく異なると見ているわけである。

先に、役割期待に占める主体的営為の強さの度合を測る尺度として「規範の特性」に着目したが、今度は役割との同一化の度合を測る基準として「規範の由来」(die Herkunft der Normen)をドライツェルは提示する。「規範の由来」を問題にするということは、ある特定の役割規範がどのような学習環境(後述)に由来しているのかを問うこととなるのだが、彼は、この規範の由来の違いに着目して、「支配諸規範」(Herrschaftsnormen)、「相互行為の諸規範」(Interaktionsnormen)、「文化的諸規範」(Kulturelle Normen)という3つの規範類型を区別する。

「支配諸規範」——集団や組織が制度的に堅固な地位構造をもっている限り、それらはつねに支配諸関係を形づくっていると言えるが、「支配諸規範」というのは、そのような支配関係を體現したものである。そのような集団や組織においては、「諸規範の規定は相対的に厳密で、逸脱行動に対してなされると予想される制裁はよく知られており、したがって予測可能である。そして、ポジションの配置自体、支配諸関係に対応した特権付与の序列に應じるものである。巨視社会学的に言えば、この序列は経済的階級構造に結びついているか、あるいはその表現であるが、組織社会学的には、業績と従順には報賞でむくいるという原理にもとづいている。」(123)なお、ドライツェルは、この種の規範に由来する役割を「組織に関係づけられた役割群」(organisationsbezogene Rolle)と呼んでいる。

「相互行為の諸規範」——「相互行為の諸規範は、特定の状況と結びついており、その状況をはなれては、役割行為者に何も要求することではなく、したがって、要するに状況内においてのみ存在するのである。」(123)なお、この種の規範に由来する役割をドライツェルは「状況に関係づけられた役割群」(situationsbezogene Rolle)と呼んでいる。

「文化的諸規範」——「文化的諸規範の本質的部分は、社会化過程においてすでに内面化されてしまっている。そ

れらはある特定の人間集団と関連しており、その集団を「他の集団と」とりかえることは、文化的諸規範の大部分が本人自身の『超自我』の構成契機であるが故に、苦痛を伴わないでは不可能である。たとえば、ドイツ人やフランス人が移民として異国へやってきたとしても、祖国や母語を捨てざるということとはむずかしい。『生まれつき』ということは小さい時分からの教育やしつけを通じて、ドイツ人もしくはフランス人なのだから。」(123) なお、この種の規範に由来する役割を、ドライツェルは「人間に関係づけられた役割群」(personbezogene Rolle)と呼んでいる。

これまで見てきたように、ドライツェルは(i)所与としての社会的規範の与えられた方、(ii)社会的規範の妥当領域という二つの視角から社会的規範の二重の分節化をおこなってきたわけだが、この作業をふまえて、彼は社会的役割の分類を試みる。分類の基軸として彼が提示するのは、活動主体が役割遂行者として自由にふるまえる範囲の違い、つまり役割の「自由裁量」(Verfügung)の可能性という視点である。ドライツェルは、社会的規範の二重の分節化に際して採用してきた二つの軸、つまり役割期待に占める主体的営為の度合、ならびに役割の担い手の役割との同一化の度合という二つの軸に着目して、両者をクロスさせたものとして、先の基軸を構想する。こうして第一表のような社会的役割の分類図式が提示されることになる。

この分類図式についての批判的検討は後述に譲ることにして、ここでは、ドライツェル自身がこの図式をどのように位置づけているかを紹介しておこう。

まず、この役割体系自体の限界ならびに性格について彼はこう述べている。「社会のポジション分化体系については、したがってまた、そのつどの支配諸関係ならびに社会的役割の関係示唆的性格や「生活体の参与」(organismic involvement)についても、この表からは何も推定できない。この表が指示しているのは、ただ、役割期待に圧縮さ



第一表 〈社会的役割の分類図式〉 (H・P・ドライツェル)

		強 ←———〈同一化の度合〉———→ 弱		
規範の由来		文化的諸規範 〈人間に関係づけられた役割群〉	支配諸規範 〈組織に関係づけられた役割群〉	相互行為の諸規範 〈状況に関係づけられた役割群〉
規範の特性	既定の役割執行のための規範 〈規則への服従〉	社会化される際の役割 (子供・患者)	規律服従を強要される役割 (兵士・囚人)	規則の遵守を要求される役割 (フットボール選手) (取引関係者)
	役割課題達成のための規範 〈課題の成就〉	援助を期待される役割 (両親・司牧者)	労働を期待される役割 (郵便職員、労働者、団体長)	最大限努力を期待される役割 (受験者、討論会のリーダー)
	役割の个性的形成のための規範 〈価値実現のスタイル〉	関わりを求められる役割 (夫・恋人) (カリスマ的指導者)	力量を求められる役割 (政治家、役者) (学者)	交際を求められる役割 (ゲスト・隣人)

(出所、gLLG, s.140)

H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(上)

れた限りにおける社会的規範のともかくも決定的な性格と役割の担い手たる個人に対する多様な要求という二点だけである。」(141)

次に、個々の役割類型の名称について言えば、それらは暫定的なもので、議論の理解を助けるための手段と見なされるべきだと断わっている。とはいえ「分類表にあげられている例はわれわれの現代社会における社会的役割の類型学に関連したものである」(143) とか、「分類基準そのものは別の社会の役割構造にも適用しうるものでなければならぬがしかし、個々の役割類型の例の方は、われわれ自身の社会からとってきたものであって、さしあたりこの社会にのみ関連している」(143) といった説明も見られる。したがって、これらの役割類型の性格づけの内に、ドライツエル自身の現代西ドイツ社会についてのイメージを読みこんだとしても、決して的外れとは言えないだろう。

彼はまた、社会的役割の規範を相互行為過程に対する構造化された補完物として位置づけているが、これはすぐれた視点といえることができる。彼がこの表現で言わんとしていることは、相互行為過程の性格を方向づける有力な契機として規範を位置づけるということなのだが、彼がそこで着目しているのは、規範の送り手と役割行為者とが互いに相手を個人的にどの程度知っているか、という点である。人間に関係づけられた役割群においては、相互に個人的な知りあいというだけでなく、その関係自体個人的な色彩をおびている。これに対して、状況に関係づけられた役割群の場合は、個人的な知りあいかもしれないが、そこでの関係は個人的な色彩をおびる必要はないし、組織に関係づけられた役割群においては、個人的な関係が存在したとしても、そうした情緒的な側面はこの役割群の役割関係を構成する要因ではないというわけである。

(三) へ役割行為を規定する諸条件について

先に定型化の議論をした時、われわれがおこなうのは、とりわけ自己や他者の行動様式、人間、状況の定型化であるという趣旨のことを述べておいた。われわれが役割行為を現実化していく場合にも、この、自己の相互行為圏の中で獲得してきた定型化群は、行動の方向づけを可能にしてくれる、いわば貯水池としての機能を担っている。なぜなら、われわれは無前提に自分たちに期待されている役割行為を現実化できるわけではないのだから。「人間の行動がすべてそうであるように、役割行動も、まずは体得されなくてはならない。」(126) こうしてドライツェルは役割行為の第一の規定要因として「学習環境」(Lernmilieu)をあげる。「役割類型にはすべて、その前提として、特定の役割行為にとつては欠くことのできない定型化された行動様式が体得しうるような、固有の学習環境というものが存在する。」(126) ここで注意しておきたいことは、「学習環境」という表現で意味されているのは定型化された行動様式を可能とする場や人間関係のことであり、したがって、相互行為の相手とか職場の「同僚」のように同種の役割行為者も「学習環境」となりうるという点である。人間に関係づけられた役割群の場合には家族内での相互行為が、組織に関係づけられた役割群では職場での仕事やそれを媒介とした人間関係が、そして状況に関係づけられた役割群では近所づきあいが、それぞれ学習環境の一例として指摘しうる。学習環境が重要な理由は、「この学習環境がどのようなものになるかに従って、個人の行為しうる役割の数や種類が制約をうけ、役割行為の質が規定される」(127) からである。

ドライツェルが役割行為の第二の規定要因としてあげるのは、相互行為状況(Interaktionssituation)である。役割行為が実現される場が状況であることは言うまでもないが、ドライツェルが注目するのは、役割が相互に関係しあう社会状況である。したがって、そこで念頭におかれているのは相互行為のおこなわれる対面的な社会状況なのだが、

ドライツェルの説明はかなりこっている、はじめにドライツェルが社会状況の要素としてあげているものを見ておこう。それらは、(1)行為主体、(2)状況のテーマ、(3)所与としての人間や物、(4)(3)の背景をなす地平、の四つである。より詳しく言えば――

「(1)状況が関係づけられる主体、あるいは、より正確には、状況を統覚し、場合によっては行為によって状況をつくりだしていく主体。

(2)相互行為もしくは相互行為の役割構造の志向的対象としての状況のテーマ。こうした状況のテーマとしては、たとえば、労働の遂行、何らかの問題の解決、課題の達成、会話等があげられる。

(3)所与のものとして状況内に存在すると主体に意識されるものすべて。したがって、特に空間的・時間的な限界とか、相互行為の相手がこれにあたる。

(4)所与のものとそうでないものとの間の、つねにのりこえ可能な境界を指し示している地平。」(129)

こうした説明をふまえておけば、彼が「社会的状況」を名づけて「空間的・時間的に構造化され、所与として共存する事物の地平によって限界づけられた、社会関係の構造の客観的な諸規定の複合体（もちろん、そうした諸規定が行為過程にある個人に受けとめられている限りでの話だが）」(128)と述べている趣旨も何とか了解可能となるのではなかろうか。

それはともかく、個々の主体に体験されたものとして個人的状況を考えることができるが、これと社会的状況との関連をどうつけるか、というのが状況規定をめぐる難問としてある。ドライツェルはこの問題を次のような形でのり

きっている。つまり彼は、個々人による主観的な状況統覚には相対的な一致が見られるという立場<sup>(4)</sup>を出発点として、社会的状況を「相互行為過程にある複数の人間たちの志向性に基づいて、またそれらの志向性の意味において、客観的状态(Lage)に関して、複数の主体的「主観的解釈に見られる相対的な統一性」(129)と規定している。彼はこの規定が妥当する前提として、相互行為に混乱が見られず、しかも関連テーマ群の範囲と状況のテーマが与えられた状況であることをあげている。こうした前提が成立している限り、相互行為の相手同士の間には、どれほど不確かなものであっても、関連テーマ群の範囲に関する何らかの一致が存在するというのである。

以上見てきたように、役割行為のあり方を規定する諸条件は何かという問題は、役割行為を規定する構造的な二つの契機として、学習環境と相互行為状況を位置づけるという形で一応の結着がつけられた。私の読みこみによれば、ドライツェルはこの位置づけをふまえた上で、各々の規定要因と役割もしくは役割行為との関連をより詳しく跡づけている。そこで、

Ⅰ〈相互行為状況における役割行為をめぐる諸問題〉

Ⅱ〈役割体系への欲求構造のくみこみをめぐる諸問題——学習環境論序説〉

という標題のもとに、ドライツェルの役割論の展開をさらにフォローすることにしたいが、その前に、なぜ彼がこれほどまでに学習環境と相互行為状況を重視するのか、その理由を彼自身に語ってもらっておこう。その理由は「両者とも、役割行為の形成に対して、いやそればかりか役割の選択に対しても、重大な影響を与えるからであり、またそうすることによって、役割期待という、しばしば空虚な外皮を定型化された行動でみたくしてくれるからである。」

### (三)への注

(1) 第三点には私の解釈がいりこんでいることをお断りしておかなくてはならない。つまりドライツェル自身の問題提起にしたがえば、第三点は「社会的役割と社会的状況との関係」となるのが正しい (cf. *SLG* s.102) のであるが、私としては、彼が実質上展開している議論に即して本文のように整理しておいた。

(2) ここではドライツェル自身の説明の順序にしたがって「定型化」、「定型化図式」の順で述べてきたが、定型化自体、特定の学習環境(後述)の中での活動体験過程を通じて生まれてくるという事情をふまえて言えば、あらかじめ多種多様な定型化図式の支配する社会的世界の中で個々人は個人に特有な定型化の仕方も含めて社会的な定型化の仕方を体得していくと言った方がより正確かもしれない。

(3) ここで斉藤茂男氏が『聖家族おおハッピーライフ!』(晩聲社、一九七六)で紹介しているハンバーガー・チェーンストアの店員とCMディレクターとレコード・ディレクターの三人に登場してもらえば、これら三種の規範によって要求される役割期待の質の違いがかなり鮮明に浮かびあがってくるのではあるまいか。(叙述の詳細については『聖家族おおハッピーライフ!』を読まれることをお願いして、ここでは本文での議論に直接関連する部分だけを引用することにしよう)。

店員の場合に期待されているのは、たとえばこういったことだ。「一本に五〇コマ、六〇コマを収めた音声入りのビデオ・カセットを五〇回以上繰り返し見せ、たとえばハンバーガーの作り方の細部を記憶させる。肉の熱し方や焼き時間をマニュアルに従って実地訓練する一方で、こうした視聴覚教材でさらに確認させ、作業が完全に一定パターンにはまるまで反覆練習するわけだ。『当社ではマニュアルへの絶対服従がすべての前提条件です。これは過去二〇年間の実績を基礎にコンピュータで割り出され、全世界で実証されてきたものですから、これに従って行動すればどの店でもすべて均一の味が提供できるようになっています。普通、調理といえは塩加減とか油のひき方とか、焼き具合とかに調理士の判断が加わるわけですが、当社は判断の材料を与えません。……』味だけではない。この会社のチェーン店である限り、店頭ではほえみかける娘

たちの服装も、いらっしやいませ、なんにいたしましょうか、というあの応答も、テーブルに置かれる皿やコップの型も色も、すべては統一されている。」(同書、六四―六五頁)「既定の役割執行のための規範」における役割期待とはこうしたものである。ここでは個人が主体性を発揮する余地などまったくいいいいほどないし、そうしたことは期待されてもいない。

ところが、CMディレクターの場合にはそうはいかない。「やっぱりウケる快感っていいですよええ。たとえば専門筋の点はからくても、バカウケすればこっちの勝ちという感じ……。他の番組のギャグに登場するとか、手ごたえありますからね。なんていうか、世間を騒がせたいっていうのかなあ、僕の感じは。大衆が喜ぶ、はやる、そこがこの仕事のなんともいえない面白さでしょうねえ。」(同書、一五一頁)CMの仕事で何が面白いかと聞かれて、CMディレクターはこう答えている。大衆が喜び、はやりさえすれば、いやより正確には、大衆を喜ばせ、はやらせることができさえすれば、といった方がいいかもしれないが、そうした条件づきで彼に期待されているのは、本人の主体性・独創性をもろに発揮することだ。これが「役割の個性的形成のための規範」における役割期待である。

「[レコード・]ディレクターたちの選曲のおもな基準は、そこ〔音楽市場調査誌『キャッシュボックス』『ビルボード』など〕にあらわれた市場動向を示す数字なのだ。国内市場の動きやファンの好みなど、一種の“経験則”を加味することはあるにしても、ディレクター個人の趣向や感覚で、海外市場動向の数字を無視してまで曲を選び出すことは、まずほとんどない。そういう意味では創造的とか、自由とかいう職業イメージとはそれほど縁がない仕事なのだ、とディレクター氏はいう。」(同書、一〇七頁)たとえ創造的といった職業的イメージとはそれほど縁がないとしても、先のチェーンストアの店員の場合とは大違いなわけだから、こうしたレコード・ディレクターの仕事は「役割課題達成のための規範」における主体的営為と課題遂行の規則との均衡の重要性をあらわしているといつてよい。

(4) 彼が相対的一致を想定しうる根拠としているのは、ここでの議論の対象が、つねに新たに産出される個別的行動ではなく、定型化された行動図式や役割構造という脈落で維持されている相互行為過程における社会的行為であるからというものである。